

ペシャワール会報

No.29



ペシャワール会 〒810
 福岡市中央区大名
 一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号
 電話・FAX 〇九二(七三二)二三三七二

- 変貌 らい病棟の女たち..... 中村 哲
- JAMS スタッフ紹介(2)..... ペシャワール会事務局
- 送り出すということ送り出されるということ..... 小原安喜子
- 大切なのは基礎技術と判断力です..... 吉武英子
- 指導ではなくスタッフと一緒に..... 藤田千代子
- 行って来ます..... 島村教子・松本智子・林達男
- ペシャワールの2年間を振り返って..... 石松義弘
- 〔神と人と泥〕移動の民クチィ..... 甲斐大策

タンクローリーのドライバー*表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

変貌

らい病棟の女たち

JAMS(ジャパン
アフガン・医療サービス)顧問医師
ペシャワール・ミッション病院医師

中村 哲

光と影の貌

保守的なイスラムの世界で女たちのことを語るのには容易ではない。外国人が町で接するのは普通上流の西欧化した女たちで、山岳地帯を行く登山家は堅くベールに顔を閉ざして逃げ去る女たちに面喰らう。「女の写真を撮って殺された」などと聞くとおさらである。西欧の女性解放論者は「男による女性虐待」に金切り声を上げるかと思えば、主人の仇討ちに息子を駆り立てる母親に「野蛮だ」と罵声を浴びせる。要するに外国人には理解できないのである。

八年もペシャワールに居て、実は私もよく分からない。男たちは滅多に女の話をしてないし、尋ねもしない。外国人の解釈や異文化論はさらに解らない。「イスラムの後進性」をまくし立てる西欧の論客の饒舌にも、反感を通り越してあくびが出る。私が解らない理由は、おそらく自分が男に生まれてきたからで、永遠に分らないだろう。それは「異文化」を理解するよりも困難だ。だが確実なのは、彼女らはその社会の中でふさわしい、女としての地位と役割を十分演じているということだ。日本人にそれが解らなくなったのは、西欧化した「教養」と共に、共同体への所属感を喪失した個人意識が無用な邪魔をするからである。パシュトゥンの女たちにはそれぞれの個性的な顔がある。近代化された自我にはそれが無い。日本人の女たちにはない輝きと、あくの強さと、しぶとさと弱さ、高貴と邪悪が率直にとり合っている。

「ペシャワール——それは光と影です」というのが、私のお気に入り、一見真面目なはぐらかし文句である。たいていの者は何か含蓄のある言葉だと勘違いして意味が通じないが、現地に居て人情の機微を解する者は苦笑いしてうなづくことだろう。

八年後の再来

一九八六年のある日、二人の姉妹が老母を伴ってらい病棟を訪れた。三人ともチャダルで忍者のように顔を覆い、初めは誰も寄せ付けなかった。

スタッフが説得してなだめると、恐る恐るぼろぼろの紙片を差し出した。見れば、以前にペシャワール・ミッション病院のらいセンターが使用していた登録カードであった。かすれたインクの字を判読すると、八年前の一九七八年に新患者として登録されたアフガン人たちで、治療中断していたものである。

別室でチャダルを取らせると思わずスタッフたちも息を飲んだ。妹は三十才にもならないのに鼻梁が陥没して顔面が変形し、手指も鷲の爪のように屈曲変形していた。らい反応で全身に潰瘍化した膿疱があり、まるでぼろぼろの皮膚をまもっている骨格に見えた。無残な姿だった。登録当時、非常に美人だったというが、その面影もなか

った。二才上の姉は顔の変形は免れていたが、頭髮は完全に脱落していた。母親は右足に大きな火傷があり、壊死を起こした皮膚は悪臭を放っていた。

らいと戦禍に苛まれ

彼女らの出身はクナールという、国境に近いアフガニスタン領内にある。彼女らもまた戦争の犠牲者であった。ソ連軍の進攻で内乱が本格化したのが一九八〇年頃からで、当時クナールは激戦地の一つであり、数十万人が難民としてパキスタン領内の国境地帯に難を逃れた。

兄弟の多くはムジャヘディン・ゲリラとして戦死した。いとこ数名に守られてバジヨウルの難民キャンプに身を潜め、ペシャワール行きのバス賃さえなく、辛うじて配給の食物を得て生きていた。もちろん、一年分のらいの薬も飲み尽くしていた。

病勢は少しずつ進行していった。妹のハリマの体全体に吹き出物ができ、高熱と全身の痛みでもはや耐えられなくなった時、同情したキャンプのゲリラ指導者がペシャワールに送りつけて来たのである。

ミッション病院の女性病棟



泣き叫び心の膿を出し切って

彼女らは何かに脅えていた。苛酷な体験は容易に想像できたが、敢えて私は詮索しないことにしていた。このような病人に必要なものは、ともかく病を癒し少しでも「人間」としての誇りを取り戻させることである。第一段階は、ともかく餓死の危険がな

く、出来る限りの治療が保証されている事実を知らしめることである。人間が極限に近い苦勞の痛手から立ち直るのは時間がかかる。べたべたと優しくするよりも、泣き叫びを放置して思い切り心の膿を出させる方がよい。事実と結果が最も雄弁である。

こうして彼女らは少しずつ快方に向かっていった。——と述べればいとも簡単だが、狭い病棟にひしめき合う中で、気違いじみた叫びは、スタッフにも私にも他の患者たちにも大変な忍耐を強いたのである。(後にある外国人が来て、「病棟の無秩序と悲惨な女性患者の境遇」を嘆いたが、私には即座にその意味が分からなかった。瀕死の野良犬が人間に立ち直るのを大きな希望でみてきたからである。一般にゆとりのある現代社会で育った者は、緻密にカミソリで木の皮を傷つけ得ても、大ナタで幹を切り倒すダイナミックな感覚に乏しい。)

半年後には母親と姉の方は小康を得て退院した。すっかり笑顔が戻っていた。ここで話を終えれば感動的な治療物語になるが、それでは彼女たちの特性が伝わらない。

(続く)



興の夢を 療にかけて

紹介(2)

グララン(看護師)

バルワン出身の医科大生。4年前にベシャワールに来、JAMSには1年半近く前から勤務している。物静かな、笑顔の優しい人である。アベッドと並ぶ有能な看護師になるべく、期待したい。



◀ JAMSの初期の診療所
現在は学生達の寮、じゅうたんワークショップとして用いられている。

▼ アブダラミッド(ドライバー)

JAMSのドライバー。アフガニスタンではエンジニアの大学に通っていたため、ストーブが故障した、ヒューズがとんだ、と言っては修理に忙しい。JAMSでは数少ないパターン人のひとり。一年前、7人目の子供が生まれた。

ダウラット(見習い)

クナール出身。JAMSの最も古いスタッフのひとり。もとはミッション病院に入院していたが、完治後、身よりがなかったためシャワリ先生のもとに身を寄せ、以来JAMSのスタッフとして働いている。色々話すと止まらない、冗談好きで人なつこい少年である。





▼ Dr. シャハラ (医師)

カーブル出身。カーブル医科大卒業後、しばらく産婦人科病院等で働いていたが、2年前家族と共にベシャワールに移って来た。天真爛漫な彼女にとって、ベシャワールは窮屈すぎる、とチャドル(頭に被るショール)を指してよくつぶやいていた。



◀ カメル(検査技師見習い)

パンジシェール出身の19歳。高校生の時、兵役を拒否するため両親と別れ、ひとりベシャワールにやって来た。以来JAMSに住み込み、勉強、検査室見習いを続けている。もとは明るい少年なのに、淋しい表情の時の方が多かった。



アフガン復興医

JAMSでは現在43人のアフガン人スタッフが働いています。

JAMスタ



▲ ミラジャン(門番)

暑い日も寒い日も、車が近づく音がしたら、門扉に飛んで行くミラジャンは前出のドライバー、ハンジャンの弟。喧嘩っ早いのが玉にキズで、訪ねて来た人相手に悶着を起こすのを何度か見かけた。余談だが、ベシャワールではどこの家も高い塀と門扉で四方を固く守っているのが普通。

[JAMS 診療報告] (1991年3月1日～8月31日)

◎フィールドワーク

訪問難民キャンプ 20ヶ所
診療患者数 のべ1,757名

◎検査

血液検査 2,353件
化学反応検査 658ヶ
らい細胞検査 171ヶ
尿検査 2,609ヶ
便検査 2,783ヶ
モントークス検査 85ヶ
心電図 201ヶ
X線 662ヶ

◎ベシャワール診療所

外来患者数 のべ11,869名
入院患者数 169ヶ
退院患者数 173ヶ

◎テメルガール診療所

外来患者数 のべ3,882名
マラリア検査陽性 629件
血液検査 1,312ヶ
尿検査 1,066ヶ
便検査 1,417ヶ
らい細胞検査 201ヶ

●ペシャワール会総会特別講演

送り出すということ 送り出されるということ

国立らい療養所 小原安喜子先生

小原安喜子

去る七月二〇日のペシャワール会総会で、岡山県邑久にある、国立らい療養所 小原安喜子先生が講演されました。お話は、ペシャワール会発足当時から、現地へ赴くワーカーのための研修をはじめ、様々な支援をいただいている先生のお人柄があらわれる素晴らしいものでした。

*らいが治る時代

ただ今、過分なご紹介をいただきました。少々あがっております。

ここで、少し病気としてのらいについて説明をしたいと思えます。(注：大分前から、らいをハンセン病とよんでいます。差別のにおいのしみついた「らい病」ということばと区別するためです。医学上の病名は今も「らい」です。)

らいと言いますのは、お年の方々には手指がなくなる、鼻が落ちる、そして外から見た時に人として形良く保っていくべき姿が崩れていくという記憶があつて辛く悲しい病気であり、また恐れられた病気でもあります。ところが、だんだんに良い薬が出てまいりまして、今は三つの薬を組み合わせて使いますと、らいは治る病気にかわってきました。治らないと思われていたらいは治る時代になりました。

*三つの薬

多分、この中には医学生の方や医療関係者の方もいらつしやるでしょう。薬の効き方を説明します。らい菌が自分と同じ子孫を作つて増えてゆくに必要な蛋白質の合成の根本的なところ、それはRNAといま

して——皆さんRNA、DNAという核酸のことはよくご存じだと思いますが——その自分の体である蛋白質を合成する基点のところをたたく薬ができました。その薬は菌を殺してくれます。その次はずっと前にでた薬なんです。菌が増殖していくのには、葉酸というものを使うんですが、その葉酸代謝に必要な材料にそっくりな薬のみますと、人体にすみついていらい菌の中からは、それが葉酸の材料と間違えられ、それを取り込んでしまい動きがつかなくなるために菌が死んでいくという薬があります。これが二番目の薬です。三番目の薬は炎症



総会でお話しされる小原先生

を抑えるという作用といっしょに人体自身
 が持っている菌を殺す機能を活発化すると
 という形で菌を処理してくれます。この三つ
 が、結核の治療法として知られる三者併用
 と同様に使われるようになって、コロッと
 病気が治るようになりました。こうして、
 らいは治る病気になりました。

***ペシヤワール会報の関わり**

それにもかかわらず、らいを治せないで
 いるという悲劇があります。この問題と取
 り組み、関わっているのがペシヤワール会
 です。つまり治る病気とわかっているのに
 治せないという、このいらだたしさをじっ
 と耐えながら、何がこれを阻んでいるのか、
 そこを見つめて戦っていらっしゃるのです。
 治す薬があつても交通や人材などの事情で
 人々に行き渡らない。薬があつてもそれが、
 ベドウインの社会のように定住しないで動
 きまわっている人々の中では長期に服用さ
 れない。こういった悩みと正面から取り組
 み戦ってらっしゃいます。
 らいという病気は皮膚や末梢神経、目な
 どをおもに侵します。そこで、手や足の感
 じがなくなったり、普通の動作ができなく

なったり、汗がでなくなったりします。手
 や足に傷ができ、それが潰瘍になって仲々
 治らないということが起ります。胃潰瘍
 なら皆さんよくご存じでしょうが、手足に
 潰瘍ができ、骨がむき出しになってしまっ
 たりします。熱いつめたいがわからなくな
 ると火傷やけどをしますが、痛くないと水ぶくれ
 を知らずに歩いて悪くしたりもします。釘
 をふみぬいて気づかず歩いていた患者さ
 んにびっくりしたこともありました。悪く
 しますと、そこから破傷風菌が入り、体を
 のけぞらせて死ぬようなこともあるからで
 す。

***ワーカーに知ってもらいたい**

痛みや熱さを感じないために手、足を侵
 されて日常生活に障害が起る、その問題と
 私たちは戦っています。傷がすぐに治って
 しまえば何ともないんですが、手おくれし
 て手、足、指が落ちていく。そういうこと
 を私たちは日頃見ておりませんから、その
 ことが基本的な、どうして、どういう風に
 患者さんを困らせるかということについて、
 理解できないことが沢山あります。それで
 らい医療にたずさわるため外国に行かれる

ワーカーの方々には私どものらい療養所に
 研修に来てもらいます。そこは八十年とい
 う歴史を迎えておりますけど、六十年以上
 病を患った方々がおられて「私たちはこの
 ようにして不自由な体になって来たので
 す」と教えて下さいます。私が教えるので
 はないんです。その語り草を、語り部たち
 が伝える、その病の辛さを学んでいただく
 ために私は、ただその道作りをするだけの
 人間にすぎません。けれども、このことを
 聞いていただく中で、この病気のどこにケ
 アのポイントがあるか、どこに病気と病気
 の原因との戦いが、そして不自由と不自由
 の原因とのとの戦いがあるのかを知って帰
 っていたたくわけです。そこには、何十年
 と積み上げられた語り部たちの経験の語り
 草を聞いて、そこに目を向け、手がかり、
 足がかりを作っていくという作業があるわ
 けです。

***あるエピソードから**

ところで、私共の療養所には亡くなった
 藤本さんという女性エッセイストが患者さ
 んでいらつしゃいました。その方の書かれ
 た本で『地面の底が抜けたんです』という

したとしても、技術者を相手国が受け入れないということになりますと、それは役に立ちません。この接点になるのがビザの発給です。相手国の入国査証を受けた上で、入国するということになります。これがまた大変なんです。

私は韓国に参りました時にビザの問題を経験しました。ビザの発給は相手国の事務手続きが終わるまで待つしかありません。その時は全部荷物をまとめまして、職場へは辞表も出して、何もない状態、カバン一つの状態で一ヶ月待ちました。教会の事務所に寝せていただき、病院の当直室に割り込ませていただき、あとは友だちの家に居候しまして、そしてビザのでるのを待ちました。

ビザがなくては入れないという、この堅い一つの門を通して送るわけです。これは並大抵のものではありません。特に発展途上国は自分たちの国で医師をまかなおうとしています。外から入ってきて、いわゆる医療市場を荒らしてほしくないわけです。その中で、らいという、人が目を向けられない分野であるからこそビザがおりる状況でも、なお、大変なことなのです。

*現地へ働くボランティア

こうして送り出す実務を担う方々の御苦労を案外の中には経験していらいっしやらない仲間もあるかもしれません。一部の、現地との接点となっていらいっしやる方々の担っていらいっしやるご苦労をここで分かちあっていたきたいなあと思うし、その中で、送り出された方々のご苦労を思っていたきたいと思えます。そして、その送り出された方々はそれぞれに自覚を持っていらっしやるわけですから、その自覚を、その苦しみを共に身につける。このグループが一丸となって送り出し、何人かの方々が代表となって現場で働いていらっしやる。



小原先生とボランティアの沢田さん

そしてこそはじめて現場で働いていらっしやる方はここに寄っていらっしやる方々の全ての思いと善意を負っているという、責任感をもつわけです。それに對し皆さん方が「ご苦労さま!」という暖かい言葉でねぎらわれる。そしてふたたび元気に送り出されるのですね。

吉武先生のお話を伺って、その責任感と現場でのご苦労の様子がよくわかりました。私共が研修に来られた何人もの方々とふれあつて来た中に「現場で働くということは、限らない自己との格闘である」という言葉をおっしゃった方がありました。そしてまた、「現場で働くということは現地の人々が働いていくのを支える一つの手段である」といった方もありました。それは、はからずもまた、藤田さんが本当に実感をこめて語られた通りです。現場で苦労していらいっしやる方々のその身にしみたま言葉から、私達は現地とのかかわりあいの中で働き、人を送り出すということを学びます。そして出かけてゆく人々の身を思いながら、送り出し、現地で任を果たす皆様方の働きが祝福され、そして現地で病気に苦しみを負うその地の人々に回復をと心から祈りたく思っています。

●ベシヤワール会総会

現地からの報告 1

大切なのは基礎技術と判断力です

札幌里塚病院医師

吉武英子

まず一番最初に私にベシヤワールに行く機会を与えてくださった皆様に感謝するとともにベシヤワールでの医療活動に物質的、金銭的、精神的な応援に感謝します。今日は、なんでも話していいということなので、自分の独断と偏見に満ちた感想などを話したいと思います。

現地での診療

私がベシヤワールに行きましたのは十月の末でして、五月二十日ぐらいに日本に帰ってきました。この間、地震とか湾岸戦争とかあったんですけれども、戦争の間は周囲の、病院のスタッフのいうことを聞いて一歩も病院の敷地から出ずに一ヵ月間、病院の敷地の中で暮らしていたんですけれども、特に問題なく過ごせました。また地震に関しても起こったのが真夜中だったので

びっくりしたんですけれども、私たちの所では特に問題はありませんでした。

振り返ってみますと、十月の末に行って十一月は右も左も分からないし、十二月は中村先生が日本に帰られるし、クリスマスがあるし、一月はやつと落ちていてラマザンというイスラムの断食の月がありまして、そのラマザンのときも結構、患者が家に帰るとかで、忙しくなったりしたんですけれども、まあそれも無事に乗り越えました。

一般の診療がどうだったかといいますと、外来患者が一日平均して四、五人程度で、私たちが診ているのはレプロシーで、私は診れないのですけれども、中村先生が癲癇などの神経疾患をみて、医者が私だけの場合は癲癇や神経疾患はよそにまわってもらうとか、中村先生が帰ってこられるのを待ってもらったりしました。入院は三十人ぐ

らいいんですけども、七、八割の患者が足に潰瘍がありまして、その手術をしたりとか、治療をしました。手術は足の潰瘍を取り除くもので、平均して週に二、三件でした。日曜日はフィールドワークで患者が見つかったときに、家族内感染してはいないか、まわりにもっと発見されなくてはいけない患者がいるのではないかということを見るために、車で片道二、三時間のところをいきまして、家族を見ます。私たち、藤田さんと私は、女の人を診まして、チェックをしてあやしい人はそれなりの検査をして病院に戻ってくるわけです。それは戦争が過ぎてからは、社会の情勢があやしいので続けられませんでした。

患者さん達と共にいる幸せ

感想なんですけれども、独断と偏見に満ちているのですが、まず私が行ったことで自分にとって良かったなと思うことは、レプロシーの患者が好きだったということ、ベシヤワールの町が好きだったということ、ベシヤワールの町は生き生きしてまして、町は土臭くて、汗臭くてこれは良い意味でも悪い意味でもあるのですが、これは



ボランティアの皆さんと談笑する吉武さん

ある意味では見る人にとって衛生観念に問題があるんですけれども、私の感じではとても生き生きした町でした。それから、患者さんがとても好きでした。あちらの人達というのは泣いたりとか、けんかしたりとか、それからいろいろわめいたりとか、そういうことが結構あるんですけれども、とても人間味があつて、私が前に中村先生に日本人とどう違うのでしょうかと言ったとき、ちょうど日本の果物などは温室で育てていて生ぬるい味なんですけれどもあつちの人達は味がはっきりしていると聞かれました。そういうのはっきりした人たちで、あるときは患者同志で喧嘩したりとか、助け合ったりしていました。その様子を見て本当

に好感を持ちまして、この人達と共にいるということをととても幸せに感じました。

またあちらは、イスラム教で毎日お祈りをしていますが、私自身は、イスラム教というものは良く分からないですけれども神に対して敬虔に祈っている姿は後ろから見て尊いものにみえて、こんなに毎日お祈りをしながらと、少しでも役にたちたいと思っていました。

自分を知る

二点目は、自分自身のことを良く知ったということとです。自分自身の弱さとか、日本の中にいたら気がつかなかったようなこととか自分の欠点とか、こうすべきだといふようなこととか、いろんなことを学ばせてもらいました。日本では得られなかったようなことが、ペシャワールで得られたような気がします。行く前には行ってみないと、なにが必要でどういうことを勉強しなくてはいけないかということがわからなかったのです、どちらかというところ、一回目はしっかり出来なくてもある程度しかたないと思っていました、それにしても反省すべき点は山ほどあります。

最先端の技術ではなく

今、自分で痛切に大切だなーと感じることは医療に関する知識で、それも、日本で行われている最先端の技術ではなく、もっと基礎に根ざした技術です。最低限の道具でペシャワールの医療は成り立っているのです。そういうのを十分に使いこなせるような基礎の力が必要だと思えます。それと、判断力です。基礎知識だけに基づく判断だと困るのですけれども、もっと人間的に考えなくてはいけないこと、医療に関してもこういう傷にはこうすべきだとか、患者さんがいろいろ喧嘩したときとか、注文をつけてきたときとかにどう対応するか、日本とあちらの考え方の違いとか、そういう事で、私はとても迷ってしまいました。自身が未熟なものですから、きちっとした対応ができなかった。慣れない環境においても自分自身をきちんとみすえて、全体を見て判断しなくてはいけない、という判断力、基本と判断力が大切だなーとおもいました。とくに海外医療の場合には、中村先生が、いつも「外国人スタッフは地味にして、絶対に目立ってはいけない」と言わ

ていましたけれども、私はちょっとそのところの間違ってしまいました。決して目立とうとは思わなかったんですけれども、知らず知らずにならなくなってしまった傾向がありました。だから特に海外医療は全体のバランスを考えて、そういう意味におい

での判断力はとても大切なことだし、これから気をつけなくてはいけないことだと思えました。

最後になりますがペシャワールで仕事をさせてもらってとても感謝しています。

●ペシャワール会総会現地からの報告 2

指導ではなくスタッフと一緒に

ペシャワール・ミッション病院看護婦
福岡徳洲会病院看護婦

藤田千代子

こんにちは、去年の五月からペシャワールのらい病棟で仕事の手伝いをさせてもらっている、藤田です。いつも皆様の暖かいご支援に感謝しながら患者さんの表情や行動でうれしいことがあったりすると、私はここで仕事をさせてもらってうれしいなあと思っていました。ありがとうございます。

一番難しかったこと

ペシャワールについては、吉武先生が話されたので、私がしている仕事について少し話して、あとは難しかったことを話し

たいと思います。仕事は、午前中は患者さんの足底潰瘍といって、足に潰瘍ができるんですけれども、そのガーゼ交換をします。午後からは日誌をつけたり、薬の準備をしたり、患者さんのニーズに応じて軟膏を塗ったり、そういうことをしています。

一番難しかったことといえば、いつも中

村先生が言われていた、「日本からワーカが行ったときに、指導的な立場ではなく、現地のスタッフと一緒に仕事をしなければならぬ」ということで、聞いている分にはそう難しいとは思わなかったんですけど

ペシャワール会現地報告会
アフガン難民の診療に従事して



総会で報告する藤田さん

れども、実際、中に入って現地のスタッフと仕事をしてみると、一つ一つのことについて、意見が違ったりしました。

自分がつい手をだす

例えば消毒のことについて話しますと、なぜ皮膚の消毒が必要かということを現地の人が話しているのを聞くと、ちゃんとその必要性ということを知って消毒しなければいけないということはしっかり理解



募 集

ペシャワール発

「共に歩む」ワーカーを!!

JAMS とミッション・ホスピタルでは日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

短期長期を問わず受け入れます。送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々の方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

- ① 募集対象：
 1. 医療技術者（医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。
 2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。
- ② 6カ月以上の滞在者は、現地で1カ月、ヘルシャ語またはパシュトウ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をさせていただきます。
- ③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを負担します。
- ④ 学生などの短期見学も拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。（繁忙期には断ることもあります）
詳しくはペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区天神1丁目10-24
福岡 YMCA 内ペシャワール会
電話(毎水曜日夜7時~10時)
092-731-2372

しているんですけれども、ちょっと目を放すとそれが長続きしない。三日間はするけれども、四日目はしていないということが、これは愚痴ではないんですが、すべてにおいてそんな感じで、ずいぶん困りました。例えば、足を洗う洗面器があるんですけども、それは膿や血液がついていて、傷を洗った洗面器なので一人一人が別々に使って、使った後はキレイに洗ってそれを干して消毒しなければいけないのです。けれども、その洗面器が二十個ほどあるんですが、洗って、消毒してというのはそう時間がかからない。その仕事自体は私にとって簡単なことなんですけれども、やっぱり現地の

人がしないと、自分が手を出してしまったり、やってしまうということになります。でもそのときにいつも虚しさを感じていました。これが援助だろうかって。私や吉武先生がやってしまうと、十分か十五分で終わってしまう仕事なんですけれども、それを日本人だけでやってしまつて援助になるんだろうか、と強く感じました。

「援助」の意味を理解

じつは現地の人と仕事をすることで難しいなと感じたのはその事です。何度も何度もイライラしたり落ち込んだりしましたが、前にも中村先生が言われた言葉に、

「そんなだから援助が必要なんだ。何もかもうまく運営されていたら私たちは必要ではない。」とありました。たしかにそうだなーとおもいながら自分を励ましながやってきました。まだまだ、らいについて未熟で患者さんのケアというところまでいってないんですけども、現地で一緒にお手伝いしてくださるワーカーの必要性を強く感じてます。どうぞよろしく願いいたします。

ありがとうございます。

* * *

一九九一年度総会報告

ペシャワール会事務局 辻 陸雄

今年も七月二〇日、福岡市の都久志会館会議室で、ペシャワール会の年次総会を兼ねた現地活動報告会が開催されました。本欄は、本来でしたら佐藤雄二事務局長のご報告するところですが、現在入院治療中のため代わってご報告いたします。

今年も、中村医師がJOCsから独立してはじめての一年間でしたが、数多く日本からのワーカーの協力を得て、会の活動にとって実りの多い一年であったと事務局では考えております。

ペシャワール会にとって、常に考え続けなければいけないことは、現地への人的、物的な支援をどのように長く維持していくかということです。従来からパキスタン北西辺境州のらい根絶計画を支えてきたドイツが、旧東ドイツの経済復興問題から余力がなくなり他の欧米諸国がアフガン難民援助を縮小しつつある今、らい根絶計画やアフガン難民の医療援助が名実ともに中村医師を中心としたペシャワール会の現地活動によって支えられるようになってきました。

それに対して日本からも少しずつではありますが現地の必要に応えてきました。

しかし今までの中村先生の報告でも紹介されてきましたように、幾多の問題を抱えるこの地域で、現地ワーカー、特に女性ワーカーの方が安心して活動できるかということは、私たちの大きな課題であります。そのため今回の総会では、ワーカーの方の生活の保障について、次のように了解を得ました。

一、現地ワーカーは、できるだけ国内所属先を派遣母体とし、ペシャワール会（以後は会）が現地活動のコーディネイトを行うが、国内所属先がない場合に限り会の派遣とする。

二、会派遣の長期ワーカーの場合、往復の交通費、障害保険の加入、現地での生活費の支給、現地の住居の確保、国民年金の負担、任期後の求職期間の生活の保障を行う。

三、他団体からの派遣の場合、住居の確保は会で行う。

（これらの詳細については、事務局へお問い合わせください。）

しかし、これらを支えていただいているのは、多く会員の皆様であるという事には

わかりはございません。事務局としてもできるだけの努力をしつつも、皆様に今後とも、末ながいご支援を切にお願い申し上げます。

また今回の総会では、来場いただいた久光明園の小原先生のご講演、中村先生を始め現地のワーカーとして活動されている方の活動紹介や、今後赴かれる方のご紹介などをさせていただきました。これらについては会報で順次ご紹介いたします。



総会で紹介される現地ワーカー経験者

ペシャワール会総会

*アンケートより

◆伝わった現地の苦勞

*現地医療スタッフの報告を直接お聞きして、ボランティアとしての精神、また御苦勞がよくわかりました。更に中村先生のお話を通して、更にペシャワール会を拡大していかなければならぬ使命があることを、一会員としてよく分かりました。

(北九州市 A・K 49歳 男)

*藤田さんのお話の中で、現地の人と共に仕事をすることの難しさというのがありました。実際にやってみた人であればわかりにくいことだと思えますが、講演等を通して一人でも多くの人に伝わればと思います。行動をおこす時、情熱だけでは不足なのだということがよくわかりました。

(太宰府市 M・Y 30歳 男)

*今日で三回目ですが、その度に現地へ行かれていた皆さんの苦勞をあらためて知り、感激しています。現地での看護士養成は成功させていただきたいものです。

(粕屋郡 T・K 70歳 女)

*九年間のペシャワール会の活動に頭が下がります。千五百万人の患者がいると聞き、驚いています。湾岸戦争の中、何かと困難が多かったと思います。何かと困難が多かったことと思えますが、どうかますます頑張つて下さい。

吉武さん、藤田さんの現場の報告よくわかりました。光明園の先生の「らい」の話、治療等のこと、自由、不自由の理解等、私は「らい」を見たことがありませんが、少しづつ理解できそうな素晴らしいお話でした。

(春日市 K・S 48歳 女)

*政治、経済が現地と直結しないことを痛感しました。これが日本のみならず、ヨーロッパ中心の国連の実際の姿であるということも教えられた気がします。

(福岡市 K・N 70歳 男)

◆反省をあらたに

*個人も国も、余分な「もの」「こだわり」を持ちすぎて、身動きできなくなつてゆく恐れを強くしました。第二次世界大戦で得た教訓を忘れ去つたとは思えない日本、そして私です。つましく生活し、志は高く持ちたいものと

反省をあらたにいたしました。生きていく限りペシャワール会に参加し続けます。(太宰府市 S・H 58歳 女)

*会員になって初めて報告会に出席でき、とてもよかったです。自分では会費を納めることで少しはお手伝いになつてゐるような気がしていましたが、思

いあがつていたり、いい気になつていたところもあつたかなと気づいて反省でき、私自身にも良い勉強になりました。(久留米市 M・I 23歳 女)

◆私でも参加できる

*医療には関係のない人間ですが、そんな者でも参加できることをうれしく思います。

(東大阪市 H・T 31歳 男)

*私は医療関係者ではないのですが、何かお役にたちたいと思いましたが、で心の中に漠然と考えていたことが、今日、中村先生のお話を聞いたことで、自分なりの小さなことですが、参加してみたいと思ひ、入会させていただきたいと思ひます。

(福岡市 H・T 23歳 女)

◆講演に感動

*小原先生の励ましの言葉に感銘をうけました。中村先生の分りやすい現状の説明、共に支えあつて人間らしい豊か

さを創りだそうとする展望のお話に、これからの新しい意欲を感じました。

(太宰府市 M・O 64歳 男)

*私は、第二腰椎破裂骨折による両下肢機能障害者です。腰椎をやられていま

すので、泌尿器の神経や足の神経に障害をきたしています。ですから病氣や外傷神経をおかされた場合の苦しみというものが非常にわかります。今回の講演会で、本当に他人事ではないなという感じを受けました。又、中村先生のユーモアのまじつた講演にはとても感動しましたし、学ぶものも多かったです。(福岡市 I・E 26歳 女)

*永年の努力、驚きでした。発展途上国への偏見を持たず、その文化も含めてのご活動に敬意を表します。

(福岡市 T・T 52歳 女)

◆ゆつくり確実に

*話された四人の方々の誠意がひしひしと感じられました。藤田さん、吉武さん、小原さんのお話の背景まで察せられ、感動しました。中村さんのお話を聞きながら、本当に氷河のようにゆっくりでも、確実に結果を刻みつけてゆきたいと願つてやみません。

(福岡市 M・M 55歳 男)

✽ 行つて来ます

* ボランティア・ワーカー *

多くの方々が

支えていて下さるからこそ

理学療法士 島村 教子

気がついたら出発一週間前

唯々、尊敬の思いだけだった中村先生が意外にひどく物忘れをなさる方だと知り、そのために話が一転二転コロコロと変わる時もあり、初めはとまどったものの、先生にもこんな面があったのかとかえって安心しました。

事務局においても、全員が本業をもつボランティアで専任がないこともあり、時々、*「あれっ!？」*と驚くこともありましたが、そんな思いとは関係なく、事務局の仕事は大きな流れの中でゆっくり確実に進んでいました。中村先生が、この会に深く関わっている人は目から鼻へ抜けるよ

行くならいっかなく

五、七月と三ヶ月福岡の事務局へ通い英語のレッスンを受けている間、スタッフの方々が会報の原稿を校正したり、入金の手続きを書いたり、コンピューターの打ち込みをしたり……と夜十一時過ぎまで食事もせずに働いて下さる姿を垣間見ることがありました。表に出て目立ってしまう私達の働きを、底の方でスタッフやその他多くの会員や協力して下さる方々が支えて下さるからこそ、安心して外で働くことができます。皆様ほんとうにありがとうございます。

ところ、わたしは四月に下見に訪れて以来、九月の赴任をめぐして語学と専門分野の研修ということで、予定していた旅行や「遊び」を取りやめて準備に入りました。けれど執行猶予のような状態におかれていたため、一人で勉強するにも身が入らず、かといって羽を伸ばすにも気がひけて、この中途半端な浪人生活も後半にさしかかった七月頃から急に研修らしい毎日となり、振り返る間もなく迎えた今日は、出発一週間前です。

ネパールのアナンダパン病院見学のあと、十月より一ヶ月程イスラマバード近郊でリハビリテーションの研修をして、ぼちぼち働き始めるのは十一月頃になると思います。元々、アジアの国々で生活してみたいという単純な思いがあったところに、次第にイスラム教国という未知の国に触れてみたいと思いはじめ、行くなら今しかないと半ば自分の年令に押し出されるようにして、今回の出発が決まりました。

すでに一年間働いてこられた女性の先輩



藤田さん(左)と談笑する島村さん(中)

もおられることだし、仲間も増えての合宿生活は楽しみです。野菜や果物がおいしくて、下見に行った折りは太って帰ってきました。

“自分の知らない国に行くなんてうれしい。”といった友人がいます。思いがあっても皆が海外へ行けるわけではないし、その分、夢を託していただいた面もあります。多くの方々の励ましや祈りや援助が支えます。では元気で帰ってきます。

もう一度

自分のために生きる

看護婦

松本 智子

楽しいはずの雪山が

春・夏・秋…と装いも新たな山、山好きの私は、真白な衣装に覆われた雪山の魅力にいつしか取り付かれ、憧れの冬山へ行きたい一心で、山岳会へ入会した。会主催の「初級冬山教室」を受講し、雪山入山の切符を手に入れることができ、念願だった雪山、三月の八ヶ岳へ…と心は弾んだ。

楽しいはずの雪山。しかし、皮肉にも私達十三人は雪崩遭難事故に見舞われ、一瞬の内に生死を分かち合ってしまった。危うく救出されたのが二人だけ、その一人が私だった。その時どうすることもできず、唯、茫然と立ちすくむだけ。しばらくして、「あなたにしかできない！」と声がかかり、勇んだのも束の間、それは予想もしなかった遺体の確認だった。打ちのめされた想い、

しかし現実には容赦なく私を引き込んで行った。

あれから十年…。

人生を半ば諦めていた私だったが、せっかくもらった生命だから、もう一度自分のために生きてみよう。歳月の流れと共に少しずつ気持ちは前向きに変わっていった。

ペシャワール会とSHARKS

ペシャワール会との出会いは丁度その頃だった。昨年、神戸新聞で石松先生を掲載した「ペシャワールでの医療活動」の記事を目にしたのがきっかけとなった。

漠然と海外へ憧れていたことや、看護婦であり何か出来ることがあるかも知れないとの思いで問い合わせてみた。その後、偶然にも中村先生と早々にお会いする機会があり、徐々に話が進んでいった。



ミッション病院の宿舎で、左から二人めが松本さん

今年の三月神戸の病院を辞め、五ヶ月間ではあるがらいに、知識を得るために、国立療養所邑久光明園へ就職した。当初、異様な集落のように思えて不思議でならなかった療養所もらいに、関する知識を得るたびに、奥の深いものであり、中途半端な関わりをしてはいけないという思いにかられた。今まで一般病院の経験しかない私にとつて、未知の世界であった光明園も、私なりに理解することができるようになり、生涯忘れることのできない貴重な経験をするこ

とができた。
そして、いよいよペシャワール行きが迫ってきた。

一日も早く

JAMSに行って仕事がしたい

レントゲン技師 林 達男

今まで得た知識や経験を、どれ程活かすことができるか不安ではあるが、私なりに何かを見つけてきたいと思っている。

母の死を一つの契機に

中村先生の『ペシャワールにて』を三年前に読んで大変な感動を覚え、このような素晴らしい働きをなさる先生のところで、共に働くことが出来るなら、素晴らしいことだなどと思っていました。

その当時八十歳の母親を抱えている長男として、母を置いて行くわけにいかず、自分の心中にしまっていたのですが、こんなことを言うと大変な親不孝のようですが、二年前母はなくなり一周忌もすませることが出来ました。幸に小生も九一年四月に退職出来るので、家内に自分の気持ちを話したところ、家内も快く理解してくれました。

そこで早速ペシャワール会の事務所をたずねて、相談しました。そこで「一度現地を見学してから決めてはどうですか」とのアドバイスをいただいたので、昨年の四月のゴールデンウィークを利用して現地に行ってみました。

こげな所には住みきらん

四月三十日の九時、成田を出発し、イスラマバードに現地時間の八時頃に着きました。通関手続きも無事終了空港ロビーに出た途端、家内の「こんな所には、私ほとも住みきらん」が第一声でした。それは一八〇センチはあるかとおもわれる大男たち、それに顔じゅう髭だらけの男ばかり、

女性は一人も見当たりません。その男たちが三、四十人何か大声で叫んでいる。私に解るのはただ「タクシー！ タクシー！」の声ばかりです。正直言って私もギョッとしました。この先どうなることかと不安でした。

そこへ九大の留学生のアマルさんのお兄さんが流暢な日本語で、「やーあいらっしやい」と迎えにきてくれました。ホテルは予約しているので、タクシーで行ってください、タクシーは私が話をつけますとのこととで一安心しました。地獄で仏はこのことです。早速タクシーの運転手について女性四人とふとつた私と五人、それにそれぞれのリュックや手荷物です。乗れるのかかと不安でした。車は十四、五年昔のカローラでした。我々の不安をドライバーは見抜いたのか、平気な顔で「OK、OK」と言いながら夜の町を物凄いスピードで走り抜けて行きます。さすが日本車だなと感心しました。

ヘリコプターのような扇風機

車は暗闇のでこぼこ道を走り、バザールらしき中を走り抜けます。町は人、人、人

ですが女性はたまにしか見当たりません。そのうちに車はホテルのまえに着きました。しかしそれは私の予想していたホテルとはかけ離れたものでした。間口は狭く、それでも三階建てなのですが、玄関を入ってすぐフロントです。そのすぐ近くに七、八人の髭づら男がたむろして、同行の美人の一人ひとりの品定めの様子です。やっとチェックインがすんで二階に続きで二室がとれました。

てすりも何もない階段を上るとそこに門番の老人がいて部屋に案内をしてくれました。その部屋は二十畳位の広い部屋で、ベッド二つと、ちゃんなテーブルとソファが置いてあるのみです。天井にはヘリコプターのような扇風機が緩やかに回っています。バス、トイレ付きですが水しか出ません。それでもシャワーを浴びて気持ちよくなつたところに、アマルさんの奥さんが子供さんとお兄さんと一緒に訪ねてくれました。

明日の行動計画を心配して、飛行機よりもマイクロバスの方がクローラーがきいて早くペシャワールにつくのでそのほうがよいとの勧めで、マイクロバスに決めました。翌朝またお兄さんにペシャワール行きのバ



フィールドワークに出掛ける前のひととき、JAMSにて

スセンターまで送っていただき、大変お世話になりました。

アフガン復興の夢へ情熱

我々の乗ったマイクロバスは日本の自動車学校の中古車でした。ボディにその名前が書いたままでした。その車の走ること、ここでも日本車の優秀性を見せつけられました。ペシャワールに予定どおり十二時きっかりに着いたのには感心しました。このような細かい思いをしながらJAMSに着いたのです。

JAMSの皆さんは大変快く歓迎してくれました。特にコックのモハマッド・クル氏の心からのもてなしに感謝致します。スタッフの皆さんが祖国を離れての生活は大変なことだと思いますが、明るく楽しそうに働いていました。これも中村先生・シャワリ先生のアフガン復興の夢に対する情熱を理解し、自分のアフガンにたいする思いが一つになったことからの現われと思えました。

中村先生と患者さんとの絆

JAMSの働きは医療の面だけでなく、患者さんの生活自立やアフガン帰国後のことまで考えて指導されていることに感心致しました。このことが一日も早く実現されることを祈ります。また患者さんの中村先生に対する思いの深さに感心しました。それはミッション・ホスピタルでのことでした。中村先生が数日後に日本へ帰ることで事務処理のため、ばたばたされている時です。中村先生がジープに乗り込むその時に、一人の女性の患者さんが先生の手にはすがって涙ながらに何か話しています。私には言葉が分かりません。先生も少し涙ぐんで

いました。先生は優しく二言、三言、応えて車は発車しました。

しばらくして中村先生の話で、あの患者さんは僕が日本に帰るので心配して車のとこまで来たのだ、僕が又すぐ帰って来るので心配いらぬと説明したら、早く帰ってきたくれといつて安心した、と言つて通訳してくれました。言葉の分からない私ですが、その時これが本当の患者さんと医師者との人間関係だなと、思いました。このような人間関係を異国人としてつくり得た、中村先生の間人としての素晴らしさに二度ほれました。私も一日も早く、ペシャワールへ行つて、JAMSの皆さんと共に仕事が見たいなと痛感しました。

それから一年半がすぎた現在、思いは変わらなくても、足はほとつき、目はかすみ、体がついてこん近頃ですが、許されるなら一日も早くJAMSに行つて共に仕事が見たいと、準備をしている今日です。どうか皆さんの祈りの内に覚えていてください。またアフガニスタンに平和と経済の復興が一日も早く実現し、難民の皆さんが、故郷に帰られて、平和な暮らしが一日も早くからんことを祈っています。

ペシャワールの街角から②

八百屋

ペシャワールの魅力のひとつに、新鮮味な野菜・果物があげられます。農村からとれたての、そのままの野菜が所せましと店頭に並べられ、昔ながらの分銅量りを使って、この大根二本にじゃがいも五つね、と必要な量だけ買うことができます。そしていつも、気の良い店主がこれをおまけだよ、とチリだとかニンニクだとか何か余分に袋に入れてくれるのです。虫喰いもあれば、決して形の良いものばかりでもなく、季節が終わればサツと市場から姿を消してしまうペシャワールの野菜は、だからこそあんなに美味しいのでしょう。



※ペシャワールの二年間を振り返って

共に考え続け、行動していききたい

天心堂へつぎ病院医師 石松義弘

ペシャワールでの二年間の任期を終え、帰国された石松先生に二年間を振り返って一文を寄せて頂きました。

先生は現在、第三世界での医療協力に関わり続けるべく、国内で色々と研修を積んでおられます。

初めての長期ボランティアで大変な事も多かったと思います。

本当に、お疲れ様でした。

* * *

まず思うことは、本当に多くの方々にお世話になったことに対して、感謝したいということです。本当に多くの、ペシャワール会をはじめ日本の方々に支えられたからこそ活動できました。中村先生をはじめペシャワール会事務局の人たちの支えが、本当にありがたかったです。



JAMSのスタッフと仕事する石松先生

また、現地のアフガン人、パキスタン人スタッフがいろんなことを教えてくれ、助けてくれたからこそ、仕事が続けられたのだと思います。

御迷惑をおかけしたことも多かったと思いますが、自分なりに一生懸命やっただけ

りです。この誌面をかりてみなさんにお礼申し上げたいと思います。
JAMSやミッションホスピタルは、これからも、中村先生やシャワリ先生のもと、活躍し続けていってほしいと思います。彼らの熱意が着実に実現していつていることは、現地の人にとって、本当に希望であり大きな救いになっています。

この二年間は、私自身にとって、第三世界の医療にかかり続けて行くために、大変貴重な勉強であったし、またこの様な仕事が必要であり、やり甲斐のある仕事だという確信を持つことができました。

第三世界には、本当に沢山の問題があります。医療のことだけではなく、経済的な問題、民族的な問題、文化や宗教、そして歴史的な経過そのものが、多くの問題を引き起こす元になっています。そして、それらの問題は、単に彼らだけの問題ではなく、本当に私達日本人と日本という国と深く結び付いた問題であり、決して人ごとでは済まされない時代になってきているということを感じます。

これからも、第三世界の問題を、共に考え続け、行動していききたいと願っています。

泥の中の宝石

ゆるやかに傾いて山地へ続く大地が視界を上下二つに分けている。天には雲が流れ、地には風が吹き渡る。アフガニスタンの季節移動民クチイが、天地を縫い合わせる糸の目のように地平線につらなり、何ひとつ影のない光の世界で時折ひるがえるグリーンや赤の衣装は泥の中の宝石のようである。

早発ちのクチイ達の衣が夜明け前の露を払う、

あなたはまるであの人達の衣の裾のように私の涙をふり払い……

アフガニスタンの人々が伝承してきた作者不詳の二行詩ラングダイのひとつである。

多民族国家アフガニスタンでは全ての民族が、騎馬の民、山の民、草原の民等々、それぞれの出自の物語は異なっても、元来、移動の民だった。今日その大半は定住して都市や農村や谷に生きている。一旦定住すると人々は居所の定まらない者達を蔑視するようになる。

定住してしまった者達が、近くに來れば迷惑に思うクチイではあっても遠くを往く姿には自分達の血を揺り動かされるのか、クチイの美しさを題材にした詩が少なくな

い。クチイとは、定住民の側から移動民を呼んだ名で、アフガニスタンでの呼称である。パキスタン側へ入ると同じ者達がポウインダアと呼ばれる。移動民を指す他に、追いはぎ、暗殺、斜視等の意味を含むペルシャ語である。必ずしも好意的な呼称ではない。蔑視される側は当然連帯を強め排他的になる。

地面と石

一九七〇年の旅で初めてクチイ達への接近を試みた時の私は、単純に西アジアの風物詩に憧れた一人の旅行者にすぎなかった。何度も拒絶された後、部族の系譜をたどった紹介と薬の土産と共にある小グループへの同行を許された。ひとたび迎え入れると彼等は私を生命がけでもてなしてくれた。

越冬地のパキスタン側へ東行する移動だったが、歩いている時にも私のどののどきに気を配り続けてくれた。午後の大休止の



文・画 甲斐大策

移動の民クチイ

アフガニスタンの旅から

折に、私がすすめられた茶を支度した若者二人は片道一時間を歩いて水を運んだのだ。つた。

彼等は老若男女、ほとんど全員が眼を病み、老人達はリュウマチと喘息に苦しんでいた。

今にも絶え入りそうなほどに恥じらい下うつ向いたまま顔を覆っていた頭衣を少しずつつ開いた中から現れた娘の眼は、埃の積もった長いまつ毛の下で、血のように赤かった。その瞳に目を薬をさしてやりながら私は、その顔立の強くまた甘い美しさに呆然と見とれていたものである。

同行したアフガン人は、クチイ達が性病もちだからと彼等の持物に何ひとつ手を触れなかった。

ひとたび歩き始めると誰かが凍と胸を張り、歩幅大きく、決して足をひきずらず、急ぐこともなく進むのだった。ラクダやロバとクチイ達の歩速は完全に一致していた。私には、遠くを眺めて悠然と往くら

クダが移動のペースメーカーのように見え
た。

宿営地に近づく。一見周囲の荒地と何も
変わらないが、良く見るとなれた感じの地
表がそこここにある、四、五メートルおき



に人頭大の石が転がっている。これ等の石
も良く見れば一帯に散在する石よりはどこ
か熟れた感じがした。

落ちているわけではない。置いてあるの
でもない。規則的でもなく、乱雑でもな
かった。

同じような表情の地面を私は、過去の旅
で、山地の日当りのいい斜面や街道から離

れた平地で何度も見ていた。

それと気づいてからそんな地面と石を見
なおすと、そこには聖域にも似た犯しがた
い空気が漂っているのだった。

女達はその石を手に杭を打ち、天幕の支
柱を立てる目安にしたりした。天幕を張り
終えてみると、それまで地面のただの凹み
と思っていた部分が天幕の中心にある炉に
なっていた。若者は茶を用意した。

「この石は昔から？」

「ああ。」

中年の男はうなずいたものの、考えもし
なかったことを訊ねられた表情を見せた。

「この場所も昔からなんだ？」

「そう。私が子供の頃から。もっと前も
そうだったと思う。」

長老が真顔でいう。

「私が子供の頃から、このあたりを通る
時はここに天幕を張った。そうきまつてい
た。」

彼等の宿営地は何百年も前からきまつて
いたのかもしれない。

動いていれば生きていれる

次の宿営地で私は引返すことを求められ
た。そこはいくつものルートからのクチイ
達が合流していた。散っていた同じ部族の

者達すべてが集って結婚式が行われると
のことだった。私と友人のアフガン人は、傾
いた大地一面に散る百数十の黒い天幕を後
にして街道へ向かった。

夏を清涼な高地に、冬を温暖な低地に、
春と秋を移動に過ごすクチイ達のルートを
その後の旅でも機会あることに見て歩いた
が、いずれもクチイに対して寛容な地区、
つまり極貧の定住者達が住む地帯を通つて
いた。そしてそのルート沿いには熟れた地
面と熟れた石があり、定礎したわけでもな
く所有や使用の権利を登録したものでもな
く、しかし、厳然とあった。

定住の意志を訊ねた私にあるクチイの老
人が応えた。

「動いていれば生きていれる。」

老人は、移動をやめれば死ぬ、といつた
のである。

戦いの中にもクチイ達は季節になると移
動をやめなかった。そして多くの犠牲者を
出してきた。難民達や反政府ゲリラがクチ
イのルートをたどるので、政府側が地雷を
敷設したためである。しかしクチイ達はあ
の石がある限り今日もその場所をたどつて
ゆく。

（本文は、1990年「西日本新聞」掲載原稿に、加筆し
たものです。）

●事務局だより

*中村先生とドクター・シャワリと三人でお茶をす
りながら、四方山話をしていると、遠くから女性
の唄声のようなものが聞こえてくる。アフガニスタ
ンの国境に近いテメルガールにあるJAMSの支部
診療所の宿舎にこうしていると、何か現実離れた
感覚と同時に、私たちの日本でのささやかな行為の
一つひとつが、「アフガン難民・復興支援プロジェクト」
を押し進めるJAMSや中村先生の活動と血
がかよいあっているのだと、実感できる。近々アフ
ガン内部のドラエ・ヌールにも診療所がオープンす
る(十一月一日)。

パキスタン内部に居住する四百万人の難民の人々
が安心して帰還するための一助として、山岳地帯の
無医地区に診療所を展開するというプログラムは、
気の遠くなるような話だが、シャワリ先生の言うよ
うに、「ビューティフル」な計画だ。この「ビュー
ティフルなプログラム」に私たちがいささかなりと
も関与できると思うと、やはり胸が熱くなる。と同
時に、全ては「ポリティカル・シチュエーション
(政治状況)次第だ」というドクターの言葉の重さ

の前には、「私たちペシャワール会は、常にあなた
方とあなたの方のプログラムのことを考えている。私
たちは私たちに出来るあらゆることを、日本国内に
おいて行う」としか応えようがなかった。

*今回のペシャワール訪問は短期間ながらさまざま
に印象深いものだった。とりわけ「中村先生は大変
だ」という印象を強く持った。仕事の質と量ともに一
医療者の範囲をはるかに超えているのだ。患者の日
常診療に始まって、手術にフィロドワーク、二つ
の病院の人事・運営から北西辺境州行政府との接衝
大局的なプログラムの立案から具体的な戦術展開、
日本人ワーカーへの連夜の語学授業、頻りに訪れる
ゲストの案内、日本側との連絡……。傍目にはひよ
うひようと見えるけれど、「こりゃあ大変だ!」と思
わざるを得なかった。目に見えない処での先生のご
苦勞は、推し測りようもない。こういう楽屋はなし
を先生はよしとされたいと思うけれど、私たち事務
局員の自戒のためにも記しておきたい。

「お願い」当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福
岡YMC A内ペシャワール会宛でお願いします。
(〒810 福岡市中央区天神二丁目10-24 福岡三和ビ
ル4F 郵便振替 福岡9-6559 ☎七三二七四〇)

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ
●増補版

ペシャワールにて
—— 瀧(たに)としてアフガン難民

中村哲著 四六判上製二六〇頁 価一八五四円

ペシャワールについて語ることは、人間と世界に
ついて総てを語ることであり、言っても誇張では
ない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、
麻薬、戦争、近代化による伝統社会の破壊、およ
そ凡ゆる発展途上国の抱える悩みがここに集中し
ているからである。悩みばかりではない。我々が
忘れ去った人情と、むきだしの人間と神に触れる
ことができる。

(著者「あとがき」より)

せきふうしゃ
石風社

福岡市中央区大名1-2-15
電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境
州ならびにアフガニスタンの医療活動を
支援し、必要な情宣・募金活動とともにボ
ランティア・ワーカーの派遣を行うことを
目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え
あい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一
口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇
〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工
夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努
める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任
し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
役員について審議する。
- ⑨ 本会の事務局をFARA HOUSE
(〒八一〇 福岡市中央区大名二丁目一〇
二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二
三七二) 内におく。